

エキュメニズムへの進展の一步となるか

現法王フランチェスコは、1962年に法王ヨハネス23世によって開かれたヴァチカン第二公会議の結論の一つであるエキュメニズム（教会一致）運動の進展を繰り広げようとしている。カソリック、プロテスタント、各正教会、イギリス国教会や、小さなところではコプト教会、バルデス教会とかいろいろところが参加しているが、要はイエスの教えを広げて、それをいかに実践していくかということである。イエスの教えは一つなのに、このようにキリスト教は、教会によって、あるいは教派によって、主張が異なっている。それらを解消しようと動き出しているのが、一方ではカソリックのフランチェスコ法王であり、他方ではコンスタンティノープルの総主教バルトロメオ1世である。これらの各教会等が、統一のために話し合いの席上で、教義面やその解釈のあり方では確かにかなり難しい面はあるが、行事の期日を変更することなどは、勇気はあるが決してできないことではない。その一つが「復活祭」の執行の期日を同一にすることである。「復活祭」はキリスト教会では大変重要な儀式で、人間の原罪はキリストの十字架上の死で許されたとも言われている。

その復活祭の行事の執行が、それぞれによって日が異なっている。初期の頃は、問題なく福音書に基づいてヘブライ暦の4月14日と制定されていた。しかし、ギリシャ、ローマの暦は違っていて、ユリウス暦を使っていた。そこで、西方教会と東方教会との間に、復活祭期日の制定をめぐる、決定的亀裂が生じた。2世紀末のローマ法王ヴィットーレ1世（189～199）は復活祭の執行は日曜日に限るという。一方東方教会のポリクラテは日曜日であってもなくても良いとした。その解決には325年のニカイア宗教会議まで待たなくてはならない。その時に復活祭の期日は、北半球では春分の日を過ぎた満月後の最初の日曜日と決まった。しかし、それはユリウス暦に基づいたものであった。時代は下り、1054年には西方教会（カソリック）と東方教会（オーソドックス）は完全に袂を分かち、歩みを別々にした。1582年法王グレゴリオ13世は、ユリウス暦には閏年の計算に少し間違いがあるということで、グレゴリオ暦の使用を推進し、現在に至っている。

ローマ法王の復活祭制定法の譲渡により、各正教会との復活祭の日取りが同期日と決まればメリットは大きい。噂では、復活祭の制定は毎年4月の第3日曜日が有力視されている。これはイスラエルの暦にも近くなる。そうなれば、今年の復活祭はいつだという問もなくなり、色々の準備も慌てることなく、余裕を持てるだろう。学校にとっても、復活祭前後は、短くても1週間近くが休みとなる。現行の学年度からすれば、4月のその頃に学生や生徒の疲れがピークとなる。だから、復活祭の休みで、その頃に身体を癒すことができれば、6月の学年度の終了まで体力は保てるだろう。

アイルランドの国民投票の結果を見て

2015年5月22日、アイルランドで同性愛者の結婚をめぐる国民投票が行われ、憲法でそれを保証することを明記することに賛成の投票をした国民の数は62.1%に達した。アイルラ

ンドはどちらかと言えば、今まで保守的傾向が強く、カソリックの信仰も国内に広く広がっていた。人権に関わる各議決も他の国々と比べると遅かった。例えば、離婚法が制定されたのは1995年だ。国民の信仰に対する歩みもこの50年で激しく変わった。1970年代には、日曜日に教会のミサに出席するのは国民の90%を数えていたが、現在では32%まで落ち込んでいる。首都のダブリンに限れば、さらに数値が下がり、わずか18%と言うところだ。

アイルランドの大司教マルティン氏は投票の結果を次のように見ている。

「これは社会改革であって、驚くには当たらない。国民は、国の近代化への道を行くことを決定し、カソリック教会との関係も見直さなければならない。教会にとっては、今までの歩みを反省すべき時が来たのだ。現実を見据え、現実にあるものを否定してはいけない。教会と国民の関係を見直すときが来ている。教会内部、カソリック系の学校内でのスキャンダルが国民の教会離れを起こしている。ゲイやレズの人間を愛さないとか理解しない人間は神を冒瀆しているのだ。神は全ての人間を愛しているのだ。」

このアイルランドでの結果を受けて、ヴァチカンの國務長官を務めるパロリン枢機卿は次のように述べている。

「家族問題は全ての問題の中心である。我々はそれを守るために戦う必要がある。教会の将来の対応においても、ヒューマンニティの将来、教会のヒューマンニティの将来についても保守するばかりでなく、家族についてあらためて考える必要がある。家族というのは社会生活の中心である。それ故、我々はそれを守り、議論の中心におき、促進する必要がある。ヒューマンニティの将来、教会のヒューマンニティの将来がかかわっているのだ。」

聖地はまだ増えるのか

かつてユーゴスラビアと呼ばれていた国は、崩壊してたくさんの国に分かれてしまったが、現在のボスニア・ヘルツェゴビナ首都サラエボから南西110キロの所にはメジュゴリエという町がある。そこで、1981年6月24日、聖母マリアが現れ、お告げをして消えたというのだ。その日6人の子供たちは光り輝く女性像を見たという。両腕の間には男の子の像があったという。翌日からその女性は聖母マリアであると宣言した。

カソリックの聖地、特に聖母マリアがこどものキリストを抱いて、子供たちの前に現れ、聖霊のごとく、お告げをするというのだ。その代表的例が、すでに世界的にも有名になり、巡礼の信者で賑わうフランスのルルド、ポルトガルのファティマである。ヴァチカンはこの問題を放っておく訳にはいかない。2010年前法王ベネディクト16世のもと、ルーニ枢機卿を長として、メジュゴリエ調査委員会が発足した。すでに4年以上の歳月が流れたが、結果については現法王に答申されているだろう。

その地での聖母マリアの出現は今でも続き、時間は17時45分、出現時間は5分から2時間と測定されている。メジュゴリエには、すでにアメリカ、イタリアから4千万人の人が訪れているという。メジュゴリエをルルドやファティマと同じように聖地としてまだ認めることができないのがヴァチカンの苦悩でもある。